



展示を通して、定山溪が決して「温泉」だけではないことがよく分かる。

コレも
見どころ

定山溪のあゆみを3分半の解説で学ぶ

郷土資料館の中心となる「クロニクル展示」は、松浦武四郎や美泉定山から始まる定山溪の歴史を、音声解説と共にパネルで学ぶことができる。音声ボタンを押すと、年代の移り変わりとともにスクリーン裏の資料がライトアップされる仕組みで、定山溪の成り立ちを3分30秒ほどで紹介してくれる。概要を学ぶことで展示資料への興味も一層深まるだろう。



道内屈指の温泉地はこうして誕生した

南区

じょうざんけいきょうどはくぶつかん

定山溪郷土博物館

しゅげんじや 修験者が作った湯治場

札幌の奥座敷、定山溪温泉で知られる札幌市南区の定山溪。湯治場が作られた江戸末期からのあゆみを、ここ定山溪郷土博物館で学ぶことができる。無人の施設のため、見学の折はまず定山溪観光案内所または定山溪まちづくりセンターで鍵を借りた上で向かおう。館内では歴史年表や解説パネルのほか、「生活」「温泉・観光」「林業・鉱業」「農業」など、テーマ別に分類された現物資料が展示されている。

安政5年(1858)、松浦武四郎が山道開削のために、虻田を経て豊平まで調査。一泊

した定山溪で温泉を発見したことが「後方羊蹄日誌」に記されている。この場所に温泉が湧いていることは、すでにアイヌ民族の人々にはよく知られていた。定山溪が本格的に温泉地としてあゆみ始めたのは、蝦夷地を巡っていた備前(現在の岡山県)生まれの修験者・美泉定山が、慶応2年(1866)にアイヌの若者の道案内で温泉と出会ったのが始まりである。定山はそこで温泉の効用を説きつつ暮らし、明治に入ると開拓使に道路と温泉場の建設を働きかけて運動。本願寺道路(現在の国道230号の基礎)ができると、時の開拓長官・東久世通禧がその功績にちなみ、この地を「定山溪」と命名した。

定山が開いた温泉は「元湯」と呼ばれて受け継がれたが、明治時代の定山溪は交通の便も悪く、ひなびた湯治場であったという。その一方で鉱業や林業が発展し、労働者の流入に伴い市街地の人口も増加。交通の便の悪い定山溪～札幌間で、産出物や観光客を効率よく運ぶべく、鉄道の計画が持ち上がる。

大正7年(1918)、白石と定山溪をわずか1時間半で結ぶ定山溪鉄道が開通すると、一躍人気の観光地となった。大正12年(1923)には小樽新聞が募集した「北海道三景」に選ばれ、春は桜、秋は紅葉と観光客が急増。昭和4年(1929)には東札幌～定山溪間が電化され、所要時間も50分と大幅

に短縮された。

昭和44年(1969)に廃線を迎えるまで、定山溪の興隆に大きく貢献した定山溪鉄道。同館では駅名看板や運行区間表示プレート、切符など、ありし日の「定鉄」を伝える現物資料や貴重な写真を見ることができる。



今となっては懐かしい運行区間表示や電車プレートも。



定山溪鉄道の「小金湯」駅で使われていた駅名標。

- 住所：南区定山溪温泉東4丁目308
定山溪小学校敷地内
- 電話：011-598-2012(定山溪観光協会)
- 休館日：11～4月
- 観覧時間：9:00～16:00
- アクセス：じょうてつバス「定山溪車庫前」
停留所から約350m
- 資料収蔵数：約1,000点
- 開館年：昭和57年(1982)

※令和7年4月に札幌市立義務教育学校定山溪学園の敷地(南区定山溪温泉西1丁目31番地)に移転予定